

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ローマで双子育児②⑦

浅田 朋子

双子の娘たちは現在イタリアの小学校の4年生。イタリアの学校制度は、小学校5学年(6歳~10歳)、中学校3学年(11歳~13歳)、高校5学年(14歳~18歳)となっている。そして双子もこの9月からはとうとう最終学年の5年生なる。来年2025年の9月には「Scuola secondaria di primo grado(中学校)」に行くのである!月日の経つのはなんと早いものか…。

私は生まれも育ちも日本なので、自分が経験したことのないイタリアの学校制度を理解するのになかなか苦労した。が、それも4年が経ち、学校側からの連絡事項や授業に関して「な、なんじゃそりゃ?」と慌てふためくこともなくなった。以前は保護者のSNSグループチャットの連絡やコメントも「ああ、なんか私もコメントした方がいいのか?あわあわ…これどういう意味で書いてるんだろう…」と皆の意見や真意が気になって気になって仕事上の夫に相談し、さらに返信を夫に書いてもらいそれをコピーしてSNSグループチャットに貼り付けていた。しかし今は、ママたちの文句だらけのコメントが延々と続く中にひっそりと埋もれてしまった「重要な連絡事項」からの「すみません!!ここなんです、私なんです、大事な連絡事項は!!」と言う叫びを素早く見つけられるようになり、さらにグループチャットの通知音を「常にミュート」に設定し「達観できる」状態にまできている。たまにモンスターペアレンツのママのコメントが入ると「まーた、わけ分からんこと言ってるわ!」と

夫に「見て!またこんなん書いてるで~」と面白おかしく報告している。私も成長したものだと思う。

4年の間で様々なことに慣れてきたが、今でも驚き焦ってしまうものがある。それは「学校からの電話」。



【定番のピッツァ・マルゲリータ】

小学校では連絡用のアプリがあり、そこに学校からのお知らせが届くので、保護者に学校側から事務的な用で電話がかかることは一切無い。担

任からの連絡はクラス代表を通して保護者の SNS グループチャットにくる。だから学校から保護者に電話があるとすれば、それは「子供に関しての緊急連絡」なのである。

ところがこの連絡、親は「な、何があったんだ！！」と電話を握る手が震えるが、なんのことはない、ささいな事で簡単に連絡してくることが多い。そして保護者は「ああ、そうなんです、ちょっと気分が悪いだけ…家に帰りたかって言っていますか…そうですか」と仕事中の職場で「なんだよ、おい！脅かすなよ…はああ」と脱力することになる。また、子供も子供で、ちょっと気分が悪い、お腹が痛い、頭痛がするというだけで「先生！ママに電話してください…」とか言うのだ。

イタリアの学校には、日本の学校にある「保健室」はなく、保健の先生「養護教諭」も存在しない。学校には「collaboratore scolastico（学校助手・用務員）」が常駐しており、彼らが絆創膏を貼ったり消毒したり、ちょっとした怪我などにも対応してくれる。ただ「保健室」がないのでベッドで横になり休める場所はなく、子供を休ませるには保護者に電話して自宅に帰すしかない、といえそうなのである。

ある日の昼下がり、仕事も出かける用事もなく、お昼ご飯をたらふく食べて、ベッドで寝転んでうとうとしていた時、突然、固定電話が鳴り響いた。最近ほとんど携帯電話にかかってくるので、固定電話にかけてくるのは「学校」か「勧誘の迷惑電話」だ。

「もしもし」「あー、signora、F 小学校のものです。〇〇が頭痛して体調が悪いので、連絡しました。体温を測りましたが36.7分で熱はありません。迎えに来られますか？」自宅から小学校は徒歩3分で行けるので「今すぐに行きます、5分後には着くと思います！」と告げ、慌てて家を出た。双子が先生に不調を訴えて連絡が来たことはほとんどないので、熱はないものの「どうしたんだろう…」と心配であった。

校門のベルを鳴らし、校舎の玄関ホールに「collaboratore scolastico（学校助手・用務員）」が待機している机がある。学校から電話があり娘を迎えに来たことを伝えると「あ～はいはい。えーと、4B クラスは2階ね。2階にいる用務員に伝え

るわね、ちょっと待っててください」と言われた。10分が過ぎ「相変わらず、遅いなあ…」とイライラしていると、玄関ホールに娘と同じクラスの男子生徒、ジョヴァンニのママが疲れた顔で入ってきた。私を見つけると「あら…どうしたの、早退？」と聞かれたので「うん、学校から連絡があって。娘が頭痛がして体調が悪いって言うので、迎えに来たの」と言うと「あ～、うちもよ…すぐお腹が痛いつて朝からずっと言っているみたいなの」とジョヴァンニのママはガクッとうなだれた。



【Pizza funghi e salsiccia(キノコとソーセージのピッツァ)】

このジョヴァンニ、双子と幼稚園から一緒だが、恐ろしいくらいママっ子で有名で、何かにつけてすぐに家に帰ろうとしていた。ジョヴァンニのママは一般企業で働いていて8時間勤務。幼稚園から呼び出される度に仕事を早退して幼稚園に迎えに行っていた。夫に「しかしさ、日本じゃありえへんわ。簡単に仕事を早退なんかできないし、それによっぽどじゃないと学校から保護者に電話なんかかけて来ないで？」と言うと「イタリアも、昔はそんな簡単に学校から電話なんてかかってないよ。色々社会が変わってきたんだろうね。でも仕事を早退するのは、理由が家族に関してならそんなに難しくないかもね…」と言った。「よろしい

ねえ、イタリアは！家族への愛が一番やからねえ～。日本はめざましい発展と引き換えに、家庭を犠牲にしてきたからなあ！」と言うと「ほんとにいつも嫌味だね」とため息をつかれた。

そしてジョヴァンニはもう9歳にもなるのに、まだ隙を見つけてはママのそばにしようとするらしい。「今日ね、私、仕事休みななの…。あの子、それをわかっているから仮病で家に帰ろうとしてるんだと思うの」「はあ…そうなん。でもさ、休みの日はジョヴァンニにわからせないようにするって言ってたやん」「うん、そうなんだけどさ、どうも私の手帳を盗み見しているみたいなのよね…」ジョヴァンニめ、なんと小賢しい真似を。9歳ともなると色々知恵が働くので厄介である。ジョヴァンニの担任も仮病なんて見ればわかるかもしれないが「もしかしたら」ということもあるので、子供が不調を訴えたら親に電話せざるをえないのである。保健の先生がいないので、確かに判断も難しいだろうとは思ふ。

ジョヴァンニには2歳年上のジュリアーノというお兄ちゃんがいるが、彼はとっても賢くて真面目で礼儀正しく、自立している。「ジュリアーノ、あの子は天使よ。なんでなの、同じように育てたはずなのに、ジョヴァンニはなんでこうなのかしら…」とママは頭を抱えた。うん、ほんまにな…。

そうこうしているうちに、用務員さんがうちの娘とジョヴァンニと一緒に連れてきた。ジョヴァンニを見るなり「ジョヴァンニ、大丈夫なの！？」とママが駆け寄った。100パーセント仮病と確定したわけではないので、一応母親としては確認しないとイケない。うちの娘を見ると、とつてもしんどそうである。「頭、痛かったん？いつから？」娘は小さい声で「朝からずっと」と言った。「そうか、かわいそうに。我慢してたんやね、家に帰ってゆっくりしようね」娘は給食もあまり食べられなかったようである。横にいる、腹痛を訴えて早退したジョヴァンニも「僕、給食全部残した…」と呟き「そらそうやろ」と思わず言いそうになった。「今はもう痛くない？」とママが聞くと、ジョヴァンニはうつむきながらボソリと「ちょっとだけましになったよ…」と言った。いつもは騒がしくて元気なジョヴァンニのあまりに大人しい態度に、私たちが「今回は本当か？」と思い始めていた。が、娘が「ママ、なんかお腹減

ってきた」というと、それを聞いたジョヴァンニが「ママ、僕ピッツァ食べたい」と言い出した。「ピッツァ…」腹が痛いと言っていたのに、ピッツァ。普通、一番食べたくないものだろう。「ママと一緒にピッツァが食べたい」ジョヴァンニのママは呆れた表情で「さあ、帰るわよ…」と力なく呟き、とぼとぼと帰って行った。

日本の常識から見ると、イタリアは過保護な親、「しっかりしいな！」と言いたくなるような甘えたな子供が多い。でも大人が「家族が一番大事」と何の憚りもなく言い、子供たちが「ママが大好き！」と素直に表現し、その子供の気持ちを受け止め従ってあげるイタリア人の親たちを見ていると、ちょっと考えさせられる。

ジョヴァンニも中学生になれば、ママに会いたくて早退なんかしないだろう。

ある日、ジョヴァンニのママに「ピッツァ、食べに行ったの？」と聞くと「もちろん！私はビールまで飲んだわよ」と目をくるくるさせた。そして「子供が親に甘えてくる時期なんてあつという間に終わるわ。だから今は思う存分一緒にいてあげるの、しょうがないわよ」と苦笑いした。



【ローマのピッツァは薄くパリパリしていて美味しい】

(元当館語学受講生)

*** 金曜日にはすべてが香る ***

竹田 理乃

茹だるように暑く湿気た7月、京都のよーじやさんがギンモクセイのオードトワレを期間限定で販売すると聞いて、条件反射のようにショップへ吸い込まれてみたのですが、うっかりしたことに発売は8月に入ってからのことでした。小さい頃に住んでいたマンションに金木犀が植わっていたもので、香水の世界ではオスマンサスと呼ぶことになっているらしいこの花の香りとは特に長いつきあいですが、慕わしいと感じるようになったのは、おとなになってからでした。イタリアを代表する児童文学作家ジャンニ・ロダリーの足跡を求め、オルタ湖を訪れた折、夏の盛りには賑わっていたのだろうけれど、今はがらんと静まり返っているホテルにチェックインしたあと、その日のねぐらのドアを後ろ手に閉め、まだ明るさのあるうちにせめて一瞥くらいは景色を楽しもうと、重たい荷物をほとんど床へ落とすようにして、どんどん暗くなっていく窓を急いで開け放ったとき、冷たい風に乗って吹き込んできた花の香りを吸い込んで「金木犀だ」と思ってからのことです。中国原産の植物ですし、イタリアではあまり見かけた覚えがありませんので、今となってはなにかの勘違いだったような気もしていますが、あの香りとあの窓辺が頭のなかで結びついている以上、晩夏にしては寒すぎたあの夕暮れに戻りたいという未練からオスマンサスに惹かれるようになっていながらも、無理なからぬことと思われまふ。

懐かしい香りといえば、今年は阪急うめだ本店で開催された香水の催事でも思わぬ再会がありました。梅田は百貨店激戦区、その催事場へブルガリやらトムフォードやらのくり出すブースがひしめき合うのですから、おしゃれさんの多いイタリア語界隈にあって美容意識の低さにかけては

右に出るものがない私がなんの心構えもなくぶらっと迷い込んで、あっという間に眩暈を起こします。それで、これはアカンと退路を探して視線を泳がしたところ、その先に親しみやすい笑顔を浮かべた販売員さんがいて、次の瞬間には今季のイチオシの香りがついたムエットが手渡されていて、自分が好ましく感じる香りの特徴を述べ、それに近いと販売員さんが判断したボトルをいくつも見比べるところまで話が進んでいました。ここでやっと我に返って、そもそも私はどのようなブランドの商品を拝見しているのだろうかかと手元の資料を確認したところ、大きくプリントされた KENZO の文字、これには見覚えがある。販売員さん曰はく、フランスで誕生した日本人デザイナーのブランドだとのこと。この解説にも聞き覚えがある。



【ボローニャの街】

学生時代、ようやく歩き慣れてきたボローニャの通りを市場の方へ向かっていたとき、香水店の店先にいた販売員さんが「あ、あなた、日本人でしょ。これ持ってって。日本のものなの、夏にぴったり。チャオチャオ」と覇気の漲る笑顔で手のひらにねじ込んでくれた小さな試供品のパッケージにも、同じ KENZO の文字がありました。下宿に帰ってから調べてみて、世の中にはこんな風に活躍しているおしゃれな日本人がいらっちゃって、そんな方のプロダクトと欧州の片隅でこんな風に巡り合うおしゃれじゃない日本人がいるものなのだなぁと苦笑いしたものでした。それきりになっていたので、ケンゾーといえばボローニャでもらった花の香りのイメージしか持ち合わせていませんでしたが、この度、百貨店の販売員さんにお勉強させ

ていただいたところ、私の好みに合致するのはフランス限定で販売されている TATAMI の香りのお香です。なるほど、真つんな青い畳のような甘い草の香りがしました。

イタリアが好きという一点を結び目にして、それまで身近にいなかったタイプの人との繋がりができるからでしょうか、留学中には日本では縁のなかったものに触れる機会がぐっと増えました。ハイブランドのコスメというものを初めて所有したのも、この留学が終わりに差しかけた頃でした。ポーロニヤで親しくしていただいた日本人のおねえさんからいただいた、シャネルのリップグロスです。とてもシアーなピンク色というおとなしそうですが、なかに漂う偏光ラメの青っぽい輝きがあまにも強く、きれいで、気後れしてしまい、いつも化粧つけない私のくちびるがキラッと光るのを誇らしげに笑って喜んでいただいたにも関わらず、最後まで上手に使いこなせている気がしないままでした。

金木犀の植えてあるマンションに住んでいたのと同じ頃、母の実家で祖母の鏡台の引き出しをこっそり覗いて見つけたリップスティックがあまりにもきれいで、イタズラをする気が挫けてそっと元に戻した覚えが薄っすらとあります。後年になって、同じ引き出しを開ける機会があり改めて見ると、おぼろげな記憶の通りのパッケージがまだそこにあり、シャネルのマークが入っているのがわかったということがありました。このことを話すと、おねえさんは「やっぱりシャネルだと思った」となやらか得意げで、私はなんだか照れくさく、ありがたい反面、自分で選ぶとなると、おねえさんのご期待にはなかなか沿えず、お客さんになれるのはイタリアでなら KIKO がせいぜいです。キコのお店はどこも入りやすく、プロダクトのパリエーションは豊富で、価格は控えめ。めちゃくちゃに込み合っていないければ、販売員さんたちが率直にアドバイスをしてくれますし、老いも若きもいろんなタイプのお客さんを見かけるから、私はなんだか安心します。基礎化粧品も売っているので、ポーロニヤのおねえさんも、旅行中に困ったらキコか、あるいは日本にもお店のあるエルボラリオに行けばいいと仰っていました。手持ちの尽きかけた私

が実際に購入したのは、教会の売店で売っていた謎のクリームだったのですが。



【ポーロニヤで見かけた看板】

宗教施設が昔からの「お薬」を作っているというのを、小耳にはさんだことがある人は多いと思います。私が行ったその教会は、香水で有名なサンタマリアノヴェツァ教会のように薬局をもっているというわけではありませんでしたが、ロザリオやハガキなどを取り扱う売店があり、その片隅に今となっては嗜好品となっているかつてのお薬がひっそりと置いてありました。私が購入した肌を健やかに保つためのクリームや果実のキャンディ、それから香水などのそうした品々は、鍵のかかるガラスケースのなかに入れてあって、これはいったいなんだらうと眺めていると、恰幅のいい神父さんが「いいものを見つけましたね」と嬉しそうに寄ってきて、昔はこういうものを資金集めに使っていたのだと教えてくださいました。神父さんが出してくださった白っぽいクリームは、かなりしっかりと油を感じさせるテクスチャーで、肌になじませるとなにかの植物の清潔な香りがしました。ちょうど基礎化粧品が尽きかけていたタイミングだったので、まあダメそうならハンドクリームにでもすればいいやと勢いで購入したものの、その後、使い切るまで肌荒れ知らず。いいお買い物でした。

この時に購入したのはクリームだけでしたが、あの教会の売店で一番欲しかったものはなにかというと、実は香水でした。クリームと同じ棚に、色違いで3種類ほど置いてあった古風なガラス瓶のうち、窓から差す淡い日の光を溜め込んでぼんやりした薄紫色に輝いていたヴァイオレットの香り

のものがとても美しく、たまりませんでした。今に至っても香水を使う習慣が身についていないくらいですので、使いこなせるかどうかもわからないものとあって、本当にお金のなかった当時の私には気軽に手が出せないお買い物でした。購入できないものを試させていただくのはばつが悪くて、神父さんのご親切をお断りしてしまったことが、今では悔やまれます。



【ボローニャのポルティコ（回廊）】

ロダーリの著書『ファンタジーの文法』をめぐって「11. ジョズエ・カルドウッチの有効性」という取っつきにくいタイトルの章にある〈金曜日にはすべてが香る〉というフレーズに差しかかると、私はいつもこの教会の売店に心が引き戻されます。このくだりには、香水を曜日ごとに使い分けしているエレガントなご婦人と、スマレが香れば土曜日のご馳走にトリツパを買いに行くといった具合で、彼女の香水をカレンダーの代わりにしてきた街の人々が登場します。ところが、新しく街へ引っ越してきたもうひとりのご婦人にとって、スマレは金曜日の香水で——といった風に、混乱と物語の巻き起こし方が説明されているのですが、私がこのフレーズをヴァイオレットからオスマンサスまで遡る

ちょっとした回想の出発点に使ったって、お話の脱線を好まれるロダーリ先生はお気を悪くされたりはしないことでしょう。

＜参考文献＞

『ファンタジーの文法』 窪田富男訳、筑摩書房、1990年

（元当館語学講師）

～会館だより～

＜秋の無料体験レッスン＞

10月からの秋学期に先だって、無料体験レッスンを開催いたします。ご参加お待ちしております。

●イタリア語無料体験（初心者向け）

京都本校： 9月30日（月）13:00

10月5日（土）11:00

●イタリア語無料カウンセリング（経験者向け）

京都本校： 10月5日（土）14:00～

●スペイン語無料体験（初心者向け）

京都本校： 10月1日（火）16:00

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>